

グローバルに活躍する人材育成の取り組み

—帰国生受け入れで進む相互啓発・切磋琢磨

学校法人 海陽学園 海陽中等教育学校
校長 中島尚正

海陽学園は、開校して8年目をむかえたばかりのまだ若い中高一貫の男子校である。本校の立った特徴は何と言っても全寮制にある。つまり、生徒は皆、ハウスと呼ぶ寮に寄宿して生活を共にする。現在の日本では全寮制の中等教育学校はほとんど姿を消してしまっただが、海陽学園では、後述するような仕組みを取り入れて全寮制を現代に再現している。

全寮制の利点の1つは、個々の生徒、多様な生徒に目が行き届くことである。これは勉学の場合だけでなく日常生活の場においても言えることである。海陽学園では、このような利点を帰国生（男子校なのでこのように表現）の受け入れや教育にも活かしている。

人間力育成を目指す全寮制男子校

本校はトヨタ自動車、JR東海、中部電力3社のトップが中核となり、日本の有力企業約80社の賛助を得て2006年に設立された。設立の動機は、最近の若者には人間力が欠如していることに産業界のリーダー諸氏が気づき、日本の将来に不安を抱いたことである。人間力の欠如としては、異質な者と折り合いがつけられない、内にこもる、挫けやすく非力、コミュニケーション力や覇気に欠けることなどが指摘されている。

この問題は、現在の教育、とりわけ心身ともに著しく発達する中等教育の段階において、人間力を育む機会が乏しいことに由来すると思われる。中等教育では基礎学力だけでなく人間力の方も併せて付与することが大切であって、この2つをバ

ランスよく育む教育が全人教育であると考えている。欧米の伝統校は一律に全人教育に力を注いでおり、例えば英国ではイートン校に代表される全寮制のパブリック校や、米国ではボーディング校などがある。

さて、このような欧米の学校を参考にして、全寮制の下で全人教育を施すことを目的として海陽学園は設立された。そこでは、グローバル化を視野に入れて、コミュニケーション力強化のための英会話やディベート、日本文化の理解なども重視している。

帰国生経験を活かす2施策 —特別英語クラスと国際化推進ハウス

本校では、半年以上の在外生活経験を有する生徒を帰国生と称しているが、全生徒に占める帰国生の割合は約6%であり、総数でいうと約40名である。

受け入れに当たって特に配慮していることが2つある。その1つは、「特別英語クラス」の開講である。帰国生の大半は英語圏で教育を受けた英語の習熟度の高い者であり、彼らはこの特別英語クラスで学ばせている。このクラスでは入学以前の英語力の維持と発展、また海外の大学受験にも通用する高い英語力の付与に加え、思考力、プレゼンテーション能力、自己アピール力の醸成を目的としている。

なお、当クラスには海外教育経験はなくても、英語力が高いレベルに達した一般の生徒も入れて